

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和七年九月作品集

瀬野川の夏

井藤希

近所の瀬野川をよく歩いている。そこに見る景色は、季節ごとに違う趣があつて、それぞれに興味は尽きない。特に夏は、この川をよすがとして生きているものを、他の季節よりも圧倒的に多く見ることができる。また、川に遊ぶ人々も多く、その姿に接するのも、楽しいものだ。川に沿う樹々の緑は、あくまでも濃く、そして何より、夏川の流れそのものの力強さが、見ている私に格別な高揚感をもたらしてくれる。

ほどばしり夏川やがて海となる

水音に聴きうるばかり夏の川

潮入りの小さき水門四葩咲き

目高捕る手網二つの父子かな

子燕をあちこちに聞く橋の下

青鷺も景の一つの瀬音かな

足音に緋鯉顔出す川面かな

鳥声や夏川なほも暮れかねて

長々と河口を染めて大夕焼

蒲の穂の川原ただただ閑かなり

《作品鑑賞》

暁子

特別句を拝見して、夏の瀬野川はなんと豊かな川なのかと思いました。夏の川のさまざまな表情や人との関わり、そして何より命があふれています。夏の川と言え、広島では悲劇を想起させられますが、豊かなこのような川を見ることが和みます。

十句の並びは遠景を詠むことから始まり、水辺をズームアップし、また遠景に戻って終わっているようです。

目高捕る手網二つの父子かな

子供を遊ばすだけでなく、自分も楽しんでいる父親の姿が目につかんで微笑んでしまします。川は日常の中にあるのです。

足音に緋鯉顔出す川面かな

足音は作者でしょうか？川辺の風景の中に人と生き物との関わりが透けてみえます。

蒲の穂の川原ただただ閑かなり

蒲は夏、秋共に使われますが、とても俳句的だと思います。作者が細かい描写を省いたことで読者は連想が膨らみ、そして深い余韻とともに味わい深い十句になっています。

鍬形虫を国分尼寺の木に這はす

葉桜を揺らして風の止みにけり

雑木山つくつくぼうし重なりて

秋の雲松の間を通りけり

山釣りを終へれば鶴の親しくて

集落の外れに酌んで青芒

盆が来ぬ村は金屋子神祀り

海風が日傘を煽る美保関

その浦に降り注ぎけり蟬の声

広げたる漁網離れぬ夏の蝶

佐保光俊

吹き止まぬ風に揺れをり百日紅

旅人に吾に晩夏の風の吹く

立秋の宵を静かに夕餉かな

秋の朝またあの人と犬に会ふ

朝の川渡れば秋の風の吹く

魚跳ねてもとの閑さ秋の川

おしろいの密かに散れる川の端

虫の声朝の川辺に聞いてをり

窓といふ窓開け放ち虫の声

身に入むや一人の夜のジャズに更け

高尾ひとみ

久しぶり坂を上れば汗流る

今もなほ鮮やかに咲き百日紅

帰省子の空手の形を復習ひをり

とんぼうの帽子に止まり坂上る

箸とめて聞き入る朝の虫しぐれ

寝過して小鳥の声に目覚めけり

無花果を甘しと食ぶる昼餉かな

今年また能登の新米届きけり

老いの身に触れて飛び交ふ赤とんぼ

曾孫より絵手紙もらふ敬老の日

あざみ

八月やゼンの新聞切り抜いて

新聞を今日も読む子や夏休

マンガの刃の入れ所探したる

鳩を追ふ鳩を見てをり夏柳

西日中外車販売店過ぎる

炎昼の住宅街をひとりゆく

学校の公孫樹見て出る晩夏かな

裏道を飛ぶかはほりを目で追ひぬ

処暑迎ふ友の句集を棚に置き

おしやべりのつもりのインコ秋澄めり

亜矢

いにしへの吉備の涼しき句集かな

頬杖の吾子の机へ大夕焼

暁光を待宵草と待つてをり

とくどくと脈を打ちさう桃熟れて

梨ひとつ訪問バッグ重くなり

川べりの我が家へ虫の集きけり

祖母の指なんとたをやか阿波踊

あをあをと句心揺らす芭蕉かな

水澄めりいつくしまには暗き森

校庭の光れるものよ月の秋

綾乃

父母の入る本家の墓を洗ひけり

秋蟬を部屋に聞さるる留守居かな

カンナ咲く玄界灘を望む家

賑はひし浜に鳴きけりつくつくし

御座船の納屋に並んで秋の蟬

処暑の浜小波に足を濡らしては

波音を聞いて過ぎすや秋の浜

蜻蛉の己が道ゆく夕河原

秋川を急ぐことなく黒き鯉

連れ来たる犬は花野を駆け回る

井藤希

鳩が子を連れて飛び立つ夏の庭

百日紅枝の先まで咲いてをり

玻璃越しに見つけて取りに茗荷の子

休日に野球見てる残暑かな

藍莓に親子鳩来る初秋かな

三日月を見ながら帰る夕間暮

コスモスの空へと続く山路かな

藍色の山の端に見る三日の月

秋の薔薇はかには花のなき庭に

勤め終へ暮れゆく空の十三夜

大畑恵

頬杖に聞くとともにしの秋の蟬

真夜の雲低くして虫すだきけり

峠越せば稲田日和の里の見ゆ

谷川の飛沫を浴びて螢草

裏畑の草抜きをれば鴈鳴けり

ぬひぐるみ洗はれ干され秋日和

草の花生けて介護の人を待つ

小鳥来る格子戸多き町筋に

「かまつか」に午後から雨の激しくて

村分つ川は光りて鴨来る

暁子

裏山に燈籠立てて墓詣

玄関の壁に来て鳴く法師蟬

蛸の鳴きはじめたる雨上り

戸締りの鍵掛けをればちちる鳴く

雲の影花野に落ちて動きゆく

生家には積まれしままの稲架組木

鬼灯を畑から鉢に植ゑ替ふる

山荘の小雨となりて小鳥来る

芒の穂一束抱へ夫帰る

静かなる一人の朝の天高し

すみれ

手招きをされて踊の列に入る

炭坑節口ずさみつ踊かな

揃ひるてくるりくるりと盆踊

踊子の互ひに帯を整ふる

提灯を揃ひて運ぶ地藏盆

座り良き秋果とりどり供へたり

拭き上げし祠を抜くる秋の風

舞台果て虫の音近くなりにつけり

秋高し並びて家は海へ向く

盆帰省の人波に居て押されをり

縁側を帰省の赤子這ひ這ひす

幼子の浴衣の丈の丁度よし

幼子の一人で花火に火を点けて

鈴虫を朝の寢床で聞いてをり

朝顔を棚から離れ見てゐたり

窓に咲く朝顔横目に化粧する

街灯に雨の夕顔照らされて

葛の花見てからいつも家に着く

色変へぬ松故郷に帰りけり

萩の花故郷の道歩きけり

病室の夫に聞かせる夕立かな

蜻蛉の水面打つなり昼下り

伸びてゆく飛行機雲や法師蟬

行き過ぐる人の会釈や法師蟬

キチキチと飛び去る蟋蟀一步進ふ

盆の月赤く上がるやビルの上

鯉の口数多集まる残暑かな

色づく田大きな雲の影通り

手に乗せて萩の花房重かりし

指先にふれたる萩の白さかな

知佳子

ちどり

辻純江

子の顔の見え隠れして玄葵

木の枝の空蟬取つて子に渡す

帰省子の昨日癸ちけり杜鵑

暑き中匂集手にして背筋伸び

景の間を飛び出す埴追ひにけり

秋風の中を渡りて沈下橋

飾られし秋果を覆むる道の駅

竜胆を見てから登る深入山

台風の過ぎたる空を見上げけり

今日もまた秋刀魚を焼いて夕餉かな

雲雀

秋刀魚焼く焦げ目備前に乗せてよし

サウナにて今日の秋刀魚の出来を聞く

特急で稲刈りを見る速さかな

刈田なり耕作放棄地とは違う

夜の車窓自分の奥に刈田見る

美術展それらしき人達う人

花野抜けヘンゼルのケーキ屋かしら

赤々とビジネス街の宿の月

初心者のマークが二台避寒宿

特急の時刻は過ぎぬ避寒宿

ふじ女

頂に睡蓮の咲く池があり

湯治場は外灯消えて黴の宿

両隣の庭に真白き百日紅

公園で遊ぶ子へ降り蟬時雨

帰省子の好物並べ四日間

切株が座席晩夏のコンサート

沱立草人通るたび吠ゆる犬

久々に通れば秋の蟬の声

路地入るも蜩の道続きをり

宵闇に我を呼びたる人の居て

松田裕子

溢蚊の止まる迷うてをるように

新豆腐食べにまいどの誘ひかな

おしろいの咲ける日差のやはらかさ

蔓延れる蔓草の奥に秋海棠

夜の明けて色づいてくる実紫

退職の人を見送り桐一景

城趾を頂く麓水澄めり

風強き木洩日の中椿の実

橋渡る路面電車や秋の川

川土手に人佇みて曼珠沙華

村上正人

ぬるき湯に睨みつれば蟬時雨

新涼や渚に響くハーモニカ

鶺鴒のつがひ先行く石河原

秋めくや朝の外氣へ踏み出せば

透き通る空の青さや秋の山

遠山に秋日しづかに下りてゆく

遠くまで尾灯見送る無月かな

日記の手止めて聞き入る秋の雨

更待の竿休めをる潮止まり

行く秋や妻に付き添ふ検診日

森口良樹

潮は引き石はきらめく夏の日に

近寄れば鳴りを潜むる蟬の声

火取虫いまは静かに風に散り

手花火を点して帰る家路かな

毛鉤巻く道具を仕舞ひ夏終る

酒蔵のピアノにふれて夏の逝く

つくつくしの声も聞かずに暦繰る

道遠し蜻蛉の群れて添ひにけり

羽ばたきの髪を掠むる蜻蛉かな

秋楡

秋麗むかし話の山ふたつ

藍染にせんと空へ手鰯雲

かつて銀運びし道や秋の風

ペダル踏む影の速なる花野かな

備後路やこの峠にも稲実り

赤米の穂波あまねし吉備の里

どこまでも風の解きゆく芒かな

星月夜同じお守り持ち合うて

廃校の噂の母校柿の秋

彫刻の手首の筋や星涼し

病院の待合室や夏の果

尾根筋に墓の続いて夕焼空

天高し瓦溜まりを実測す

渡り鳥結婚式の費用貯め

恋人とゲーム機を買ひ金木犀

鰯雲テレビカメラの多きこと

鰯雲礎石にうつる木影濃き

寝待月テレビに上司出演す

剣振つて稽古場出れば夏の空

突然のひまはり畑に車止む

夕焼や子を見舞ひての帰り道

目をつむり厠に座して蟬時雨

ひとときの豪雨の後の虹探す

にぎやかに買ひ物をして帰省かな

草拔きの蟻蛸跳ぶ先見失ふ

カマキリが食べる姿に泣く子かな

濁流の上を群れ飛ぶ赤とんぼ

今井淳子

竹田千絃

を

次はいつ飛ぶかと思ふ秋の蝶

鍵落したちまち止みぬ虫の声

子のレゴの続いてるたる夜長かな

秋の田を褒めて話の長くなり

国道に影を落として稲雀

秋の水日の斑を揺らし流れをり

大根蒔く時を決めかね予報見る

山門の階段上り鴈の声

暮れてゆく芒の原に佇みぬ

山野ウタ

今朝一つ咲いて満開百合の花

国道を渡って行くよ夏の蝶

夏の草丈と二人で抜いてゆく

駅までの川の静けさ夏深し

秋近し二つの美術展巡る

帰り道蜻蛉を見つけ目で追ひぬ

長き夜の湯船の中の雨の音

土肥律子

草むらに入れば止みたる虫の声

斜面ごとの葛の葉刈って運びをり

秋の蚊が携帯握る指先に

一夜して白き茸の生えにけり

水澄むや黒き魚の上り来て

水澄みて魚の吐く泡弾けたる

撫子

小鳥来る湖畔の宿のティータイム

フルートの調べ伸びやか小鳥来る

気ままなる長き日曜小鳥来る

長々と白堀つづき松手入

秋麗や時を忘るる瀬戸の海

大原良子

忽然と曼珠沙華咲く寺の道

曼珠沙華目を通うて咲き揃ひけり

秋海棠葉の色選び活けてをり

一枝の秋海棠活く玄関に

秋明菊活けて導師の間を囲むる

紀英子

百日草まこと百日咲きにけり

朝早き小窓開くれば蟬しぐれ

実家から大きな西瓜けき届く

ひまはりの前に三脚立てて描く

河原静子

ピアノ曲流るる川辺広島忌

海望む丘に吹かれて月見草

小さき実を拾うて帰る秋の夕

マルシェでは木箱に林檎並べたり

熊谷ゆり子

集落のところどころに百日紅

まどろみに二百十日の雨を聞く

秋分の畳を踏んですすみけり

秋草を摘んで夕暮近きかな

桑門わかこ

長旅を終へて我が家の蟬しぐれ

鈴虫の羽化見届けて眠りけり

秋茗荷ふと訪ね来し子の膳に

故郷に姉妹集ひて茸飯

高嶋絹代

朝涼や炭酸水が喉を過ぐ

友逝きて朝蟬の声聞こえけり

雷霆にスピード上ぐる家路かな

秋浅し書齋に三線爪弾いて

松本卓士

乳母車親も泣く子も汗みづく

夕焼を待ちて散歩は社まで

居を離れ久方振りの墓参り

垣根越し母の声して花木僅

みさ子

白木槿板塀越えて花をつけ

無花果の熟るるを待たず夫の逝く

コンサート終へ友と見る盆の月

久々に姉妹の揃ふ秋彼岸

美耶

齒医者への長き道のり矣天下

境内の蟬の声消し雨激し

処暑の朝風なき道をウォーキング

桜陽

法師蟬明日も聴かせよ此処に来よ

秋高し野良に昼餉のむすび食ひ

天高し野立の客は異邦人

志路猿

靴濡らす草むらの露ひかりをり

さかづきを飲み干すごとに月昇る

振り返り振り返り見る後の月

民

梨ふたつ皿に切り分け味比ぶ

指を折り秋の七草声に出す

せせらぎに沿うて歩けば彼岸花

やす保

新涼や扉をぜんぶ開け放ち

カーペット踏み洗ひして秋の昼

今日借りし本を開ける夜長かな

山崎桂子

小灰蝶すずやかに飛び夜は明くる

無花果を鳥に残して脚立下る

柿椀げば蟻蛸も付いて籠の中

和田史子

重陽に子猫迎へて菊と付く

さつまいも甘くなあれとパンを焼く

上島康子

雨止みてあちらこちらに虫の声

お彼岸に在りし日の父母懐かしむ

古川廣子

令和七年八月度作品集より

綾乃 私の選んだ十句

蝉旺ん我有るときも無きときも
 逃ぐるとふこと未だ知らず雀の子
 犬が居て妻が居てこそ大夏野
 生身魂人生楽しと白寿なり
 寄せる波引く波を追ふ跳かな
 草も木も土手行く人も喜雨の中
 晩夏光モンマルトルの丘に似て
 夏川の静かさの中沈下橋
 藻の花を雁木に掬ふ流れかな
 緩やかに半旗靡いて広島忌

佐保光俊
 高尾ひとみ
 井藤希
 大畑恵
 すみれ
 知佳子
 辻純江
 雲雀
 松田裕子
 村上正人

雲雀 私の選んだ十句

蝉旺ん我有るときも無きときも
 夏蝶のはやも来てゐる明けの庭
 夏の蝶蔭から空へまた蔭に
 草も木も土手行く人も喜雨の中
 茄子詰めた艶とともに汽車揺られ
 ふと誰か居さうな気配夜の秋
 大暑かな行く道に影一つなく
 水嵩も音もたくまし雨後の滝
 盆帰省もうじき列車着く頃か
 米を研ぐ厨の窓に夏の月

佐保光俊
 暁子
 すみれ
 知佳子
 竹田千紘
 山野ウタ
 土肥律子
 大原良子
 熊谷ゆり子
 美耶